

能代高

(31)

夜二モ負ケズ

「どうも、やりにく感じだすな……」

柳谷了因先生（5期、能代北高、教正寺住職）は、ともらした。

「いや、たしかに、そだすべな」
同僚の先生も、気持を十分察している口ぶりだ。柳谷先生は当時（昭和二十八年）能代高定時制で教えていた。

柳谷先生はあれこれ思案した結果、次のような“作戦”で臨んだ。一人の生徒に向かって
「あなたの名前は、他の生徒同様、呼びすてにする。悪く思わねでもらいて。席は、一番うしろさ座っていてくれ」

ついでに、もう一つ注文

「授業中、あまり、手あげねでくれ……」

「ハイ」

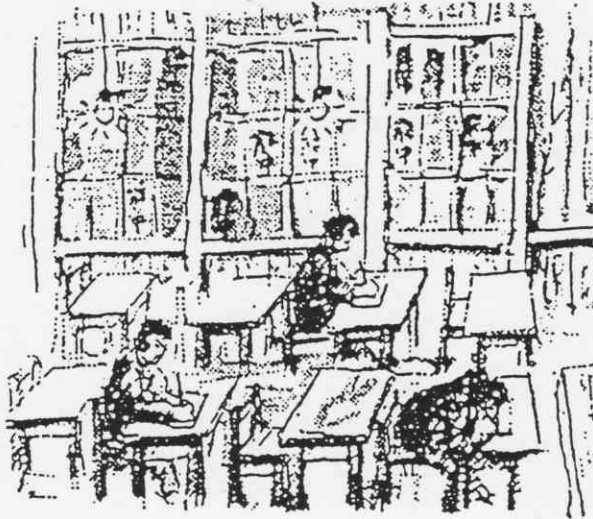
その瞬間、教室にどつと笑い声。新学期の始まりである。好調なすべり出しに見えたが。

“ハイ”と返事をしたのは、中村勝太郎（中村法律事務所）。同窓会名簿によると、中村は能高定時制4期生（S29年卒）。

と同時に、能中2期生（S6年卒）。彼の名前が、二カ所に光っている。学制は変わっているものの、一つの学校を二度卒業した変わりダネだ。

戦後の一時期、旧制中学の卒業生は、新制高校定時制の四年に編入できた。中村も、再入学の一人。その時、すでに自分の娘が高校生。“親子仲良く高校生”——町中の評判だった。

さて、柳谷先生より年が上で



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

能中の先輩でもある中村は

「先生、このどこ、どうなっているのか……」

最前列で積極的に質問する。

はじめに「手あげねでれ」とクギをさしておいたのに。

「ウム、むずかしな。その点あどで答えるす……」

柳谷先生は、ずいぶんヒヤ汗をかいた。

働きながら学べる高校の定時制——能高にも二十三年発足。勤労青年“待望”の制度。入学希望者が殺到した。

若林秀稔（定2期、若林電気商会）は

「戦争も終わったべ。日本も変わってゆぐにちげね……」

電気店につとめ、自分で授業料を払い、夜学に情熱を傾けた。

「もっと教え方の上手だ先生に、替えでけねすか」

職員室へ苦情を持ち込んだこ

ともある。

「まあまあ、それだけだば、いわねで……」

柳谷先生がなだめ役。

休み時間。廊下へ出てタバコの“一服”。バケツが灰ザラだ。

蚊に悩まされた夏。ユカタがけで登校した生徒もいた。

ある日曜日、若林は、大淵正（建設省）らと柳町のサロンへ

行った。そこに、進駐軍が遊びに来ていた。チャンスとばかり英会話のレッスンを挑んだ。

「名前は？年は？どこで生まれたか？」

習いたてのカタコト英語。つまりながら、お決まりの質問。

外人が何か答える。すぐく早口。なまりのある英語らしい。

「スロー、スロー」

もつとゆつくり話して……といい気なもの。そんな程度でも生きた英語の勉強は、あとで意

外に役立った。

「へイ、ユー」

これが進駐軍の口ぐせ。いまも若林の耳の奥に残っている。

忘れられない修学旅行の思い出は——

全日制の生徒と一緒に得をした。昼の生徒はみんな黒の学生

服。若林は背広。愛用のギターを売り、やつと着た初の背広。

旅館で、すぐていいいなもてなし。どうやら、先生と間違えられているようだった。

「まあ、いいべ……」

ホンモノの先生と同室。酒にもありついた。

佐藤勇一（定2期、能代淳城二小）は、ある日、すばらしい

レポートを提出した。柳谷先生が目を見張ったのも当然。中身

が活版印刷で、教科書みたい。佐藤は、印刷会社につとめていたので会社の印刷機で仕上げた

のだ。

原田新英（定2期、原田電気商会）、住吉新作（同、県木芳）

小林房雄（定5期、フサオカメラ店）、武田吉太郎（同、翁館総本舗）ら、能高定時制を巢立

って活躍中の“努力の人”は数えきれない。

「先生、どうしてもやめねばならねくなったす……」

涙声でそう報告。途中で学校を去って行った生徒も多い。本人は学業を続けたくても、勤めの関係からそれが不可能で……

能高の定時制は、三十年代に能代北高に合併。いまはない。

「高校も義務教育化。定時制ねぐなるのも、そう遠くねな」

定時性一筋の柳谷先生は、さびしそうだ。（敬称略）